

<p style="text-align: center;">岩手県工業技術研究推進会議 生産技術部会議事録</p>		<p>(実施日)</p> <p style="text-align: center;">平成16年10月29日(金)</p>
<p>(テーマ名)</p> <p style="text-align: center;">画像処理による土壌検査システムの開発 (中間評価)</p>		
委員	質問・意見	回答
A委員	<p>誰が使うのか？色による土壌診断は経験則でもできるし、また、畑では土の化学組成よりも、保湿性等の物理的性状の方が重要ではないのか？</p>	<p>物理的性状は別に調べて、本手法はそれらと相補的に用いるべきものである。分析時間の大幅短縮に意味がある。</p>
C委員	<p>経済的効果の観点から、費用対効果を考えると難しいテーマである。それ以外の波及効果はあるのか？</p>	<p>土壌の色分析は今までなかったことなので、手軽に分析できる手法としてスタンダード化が期待できる。行政の仕組みに組み込むことも考えられる。</p>
D委員	<p>ブランド米用の土壌検査は、かなり広い地域を対象としているが、どのような手法で行われているのか？</p>	<p>わからないので、農研センターに確認する。</p> <p>(補足):ブランド米は、肥料のやり方や管理の仕方が決まっているが、土壌検査は行われていない。一般のお米も同様である。土壌検査による品質確保のためにも早期に実用化したい。(農研センター)</p>
D委員	<p>価格が昨年の20万円から5万円に下がっているのはどういう理由からか？</p>	<p>メーカーの利益を考えると20万円程度になるが、農家が購入するには高価すぎるので、ハードウェアのパソコンを別にし、ソフトとトレイの組み合わせで5万円とした。</p>
	<p>(上記、D委員の質問に対して)</p>	<p>(プロジェクト研究推進監)</p> <p>岩手のブランドである「いわて純情米」、「いわて純情野菜」は、肥料、農薬の基準が決まっているが、どこの土壌にも単純に同じ量を用いればよいというものではない。施肥を決めるにあたり重要な土壌の陽イオン交換量を簡便に調べることができるのは有意義である。</p> <p>また、ミノルタから、植物の葉色を調べるセンサが出ているが高価であり、スキャナ程度の装置で色診断ができるのは意味がある。</p>